

氏名	榑澤三奈子 (学籍番号 08D003)		
学位の種類	博士 (看護学)		
学位記番号	第 10 号		
学位授与年月日	2013 年 3 月 12 日		
論文題目	術後化学療法を受ける肺がん患者の倦怠感のセルフマネジメント 促進プログラムの開発と評価		
論文審査担当者	委員長	木下幸代	教授
	委員	小島操子	教授
	委員	藤本栄子	教授
	委員	市江和子	教授
	委員	大城昌平	教授

## 論文要旨

### I. 研究目的

本研究は、術後補助化学療法を受ける肺がん患者が、各自の体と心の状態に応じて身体活動の増加を図ることを通して、倦怠感を軽減し身体機能と QOL を改善することを支援するための倦怠感のセルフマネジメント促進プログラムを開発し、その効果、すなわち有効性、有用性および実用性を検証することを目的とした。

### II. プログラムの開発

予備調査結果と文献的考察を基にプログラムの目的、構成要素、働きかけなどを検討した。プログラムの目的は、「術後補助化学療法を受ける肺がん患者が、各自の体と心の状態に応じて、主体的にセルフモニタリングと運動を生活に組み込み身体活動の増加を図ることを通して、倦怠感を軽減し身体機能と QOL を改善することができる」とした。構成要素は、セルフマネジメントの知識とスキルの獲得支援、セルフマネジメントに関する自己効力感と肯定的な結果予期の形成支援などとし、働きかけは、認知的支援、教育的支援、情緒的支援とした。プログラムの内容は、倦怠感や脈拍数などのセルフモニタリングと、呼吸筋ストレッチ、低強度持久力トレーニング、筋力トレーニングの3種の運動を設定し、方法は、個別セッション、電話確認、自宅でのセルフマネジメントの実施と記録とした。

### III. プログラムの効果の検証

開発したプログラムを術後補助化学療法を受ける肺がん患者に適用し、それを適用した群（以下、適用群とする）の介入前後における倦怠感のセルフマネジメントと、適用群と通常ケア群（以下、非適用群とする）の倦怠感、客観的身体機能、QOL を比較検討した。また適用群における有用性と実用性を検討した。

**【対象】** 一葉以下の肺切除術後に補助化学療法を受ける 75 歳未満の肺がん患者とした。

**【プログラムの適用方法】** プログラムは、適用群に対し術後補助化学療法開始から 6 週間に亘り個別に適用した。個別セッションは 2 週間毎に計 3 回実施し、各セッション後に対象者に自宅でセルフモ

モニタリングと運動を実施してもらい、実施内容を記録してもらった。電話確認は各セッションの1週間後に計3回実施した。

**【データ収集方法】** 倦怠感、客観的身体機能、QOL は、既存の Cancer Fatigue Scale、活動量計、6分間歩行テスト、SF-36 により測定した。Cancer Fatigue Scale の測定時期は、適用群では介入前、介入中、介入終了時、介入後1ヶ月とし、非適用群では各相当時点とした。活動量計、6分間歩行テスト、SF-36 の測定時期は、適用群では介入前、介入終了時、介入後1ヶ月とし、非適用群では各相当時点とした。適用群のセルフマネジメントについては、プログラム実施状況に関する記録調査と研究者が作成した認知過程と行動の内容を問う半構造化質問紙を用いた面接法によりデータを収集した。プログラムの有用性と実用性についてはプログラムの役立ち度や負担感を問う質問票を作成し、データを収集した。

**【分析方法】** 適用群と非適用群の倦怠感、客観的身体機能、QOL の比較には、反復測定二元配置分散分析と多重比較を行った。適用群のセルフマネジメントおよびプログラムの有用性と実用性については記述統計と質的帰納的方法により分析した。有意水準は5%とした。

**【結果】対象者の背景：**対象者は、2施設のがん診療連携拠点病院において手術後1~2ヶ月の間に補助化学療法を受ける肺癌患者で、適用群10名、非適用群10名の計20名であった。両群の対象者の背景を比較した結果、手術後日数は適用群のほうが非適用群よりも短かったが、その他の項目では両群間に有意差はなかった。**適用群におけるプログラム実施状況：**適用群における介入期間中のセルフモニタリングと3種の運動の週平均目標達成率は、それぞれ約90~100%であった。各運動の週平均実施時間または実施回数は介入の経過とともに延長あるいは増加し、全介入終了後も運動が継続されていた。**適用群と非適用群における倦怠感、客観的身体機能、QOL の比較：**適用群と非適用群における倦怠感、客観的身体機能、QOL の反復測定二元配置分散分析の結果、倦怠感；総合倦怠感( $p=0.000$ )、身体活動量；総エクササイズ、心肺機能；6分間歩行距離、QOL；身体機能、全体的健康感、活力、社会生活機能、心の健康において介入時期と群の交互作用が認められた。多重比較の結果、適用群では上記項目において全介入終了後に有意な軽減あるいは改善が認められた。

**プログラムの有用性と実用性：**プログラム参加者の大多数が、内容が役立った、方法が適切であったとし、また全員がプログラム参加において負担がなかったと回答した。またプログラムの準備と実施に関しては概ね負担がなかった。

#### IV. 結論

以上から、本プログラムは、術後補助化学療法を受ける肺癌患者が各自の体と心の状態に応じて身体活動を増加させ、倦怠感を軽減し身体機能とQOLを改善するための倦怠感のセルフマネジメント促進プログラムとして有効であり、有用性・実用性が高いことが検証された。

## 論文審査の結果の要旨

本研究は、術後補助化学療法を受ける肺がん患者が、倦怠感を軽減し身体機能と QOL を改善することを支援するための倦怠感のセルフマネジメント促進プログラムを開発し、その効果を検証したものである。

研究は、予備調査および国内外の詳細な文献検討、それを基にした概念モデルの作成、倦怠感のセルフマネジメント促進プログラムの開発・実施・評価と段階を追って進められた。開発されたプログラムは、セルフモニタリングと 3 種の運動を内容とする 6 週間の介入であり、10 名の術後肺がん患者に適用され、通常ケアを受けている非適用群の患者 10 名と比較検討された。適用群の患者は臨床経過をふまえ時期ごとに個別的な支援を受けて、自宅で 6 週間の実践を行い、各種評価指標および対象者の認知及び行動の変化が量的・質的両面から収集・分析された。その結果、セルフモニタリングと運動の目標達成率は約 90～100%と非常に高く、介入の効果を示す倦怠感や客観的身体機能に関しては全介入終了後に有意な軽減あるいは改善が認められ、倦怠感のセルフマネジメント促進プログラムとして有効であることが検証された。

適用群の詳細なデータ、さらに非適用群のデータとも比較してプログラムの効果を綿密に検証したことは、研究者の粘り強い努力の賜物である。また、プログラム参加者からは有用性・実用性に関する高い評価も得ており、本プログラムは研究成果の臨床への貢献において、倦怠感のみならず様々な副作用や苦痛に苦しむがん患者の支援を考える上で大きな貢献をされると考えられる。

以上の結果から、審査委員会委員全員により、本論文が著者に博士（看護学）の学位を授与するに十分な価値あるものと認められた。